

論文の内容の要旨

論文題目 政治家の政党移動と政党政治の変化

—日本における「政界再編」とは何であったか—

氏 名 山 本 健 太 郎

日本では、1955 年から、短期間の例外を除いて、自民党が単独政権の座に居続ける一党優位体制が 38 年間にわたって続き、極めて安定した政党システムが維持されてきた。しかし、93 年 6 月に自民党内の 2 つのグループが新党を結成し、それを契機として政権交代が起きて以降、日本の政党政治は国会議員の政党移動が頻発する「政界再編」の時代に突入した。政党の離合集散が活発に繰り返され、一時は国政選挙のたびに政党の顔ぶれが入れ替わる不安定な状況となったのである。

それから 10 年近い変動期を経て、混乱は次第に鎮静化し、2008 年現在では自民党・公明党と民主党という二大勢力が対峙するという形で落ち着きが戻ったように見える。ただし、07 年の参院選で民主党が比較第一党の座につき、「ねじれ国会」となったことで、新たな「政界再編」の可能性がメディアでも再三指摘されるなど、変化への胎動が依然として水面下で燻っている可能性も捨てきれない。

本論は、こうした日本の政界再編を題材に、政治家の政党移動のメカニズムについて包括的に分析を加えるものである。

政治家の政党移動に着目して政界再編を分析することは、二つの点で政治学的な意義がある。

第一に、政党を移動するという行為を分析することは、政党を選択する政治家のインセンティブに着目することを意味し、引いては政治家がなぜ政党に所属するのかという原理を明らかにすることにつながる。これまでの政党研究では、政治家がなぜ政党に所属するのかという問いは、いわば自明のものとされ、取り立てて論じられることが少なかった。しかし近年、日本に限らず複数の議会制民主主義諸国において、政党移動が多く見られるようになってきたという経験的事実は、政治家が政党に所属することの意味合いを再度問い直す必要性を我々に迫っている。その点で、政党移動の分析は、政党研究の地平を広げることになると期待される。

その際、本論では、いわゆる連合理論の知見を援用することで、政党移動を理論的に解き明かすことを試みる。アクターの合理性を前提に、政党間の協力のあり方を予測する連合理論を用いることで、個々の政治家の効用から出発して、新党の結成や解党、ならびに政党間の離合集散現象に至るまで、政界再編のダイナミズムを一つのツールで解き明かすことが可能になるのである。

第二に、日本政治分析という観点から見ても、90年代以降の日本政治を特徴づける一大イベントである「政界再編」に、包括的な分析を加えるのは意義深いことである。これまでの研究で、93年の自民党分裂のように、一時点での現象を分析したものは少なからず存在してきた。しかし、果たして政界再編とは何であったのかという理論的な問いは発せられることがなかった。

結論からいえば、日本における政界再編では、自民党が政権追求志向の強い議員を受け入れることで、ますます政権与党であることを最大の紐帯としていくのに対して、野党陣営は移動議員を吸収して政党のサイズを拡大しつつ、一方では分裂を防ぐという矛盾した要請を抱えることになった。野党は当初、その要請にうまく答えることができず、それが新進党の挫折につながった。一方、新進党の失敗から、民主党は、勢力拡大のため政策的旗幟を鮮明にすることに慎重にならざるを得ない最大野党のディレンマを学び、政党としての存立に根本的矛盾を抱えながら党を運営して、凝集力を保ってきた。

この最大野党・民主党の適応により、政党システムは一見安定したかに見えるが、自民党の紐帯が与党であることのみによる限り、その下野はさらなる離合集散と政党政治の流動化の可能性を秘めている。一方、民主党もまた、政権を獲得すれば明確な政策方向を打ち出すことを与党として求められ、それは自党の分裂のリスクを顕在化させる。その意味で、政界再編は未だ終わったわけではないことが示されるのである。

本論の構成は以下の通りである。

まず第2章「政党移動研究の理論的意義」で、政党移動研究としての本論の意義を、先行研究を整理する中で位置付ける。そして、先行研究から導かれた本論のモデルとして、連合理論の知見を援用して、議員の政党選択を規定するインセンティブには、政権追求・政策追求の2つが並行して存在することを述べる。連合理論を用いることで、個々の政治

家の目的から出発して政界再編のダイナミズムまで、一本の線で結んで説明を加えることができるようになる。

続く第 3 章「日本における「政界再編」の包括的観察」では、日本における政党移動の全体像について、上記 2 つの目的を観察可能な形に読み替えて網羅的な分類を行い、その特徴を観察する。

第 4 章「政党移動はいつ起こるか」では、政党移動が発生するタイミングについて、選挙と選挙の間を一つのサイクルとして見た場合に、そこに埋め込まれている制度と政党移動の関連性に着目して考察する。そうしたルーティーンな制度は、目的の異なる移動を異なる時期に発生させるきっかけとなっていることが明らかとなり、さらには新党の結成や解党といった出来事にも影響を与えていることが示される。

第 5 章「政党移動と選挙事情」では、一般に政治家の合理的な行動を考える際、最もよく使われる「再選追求の優位」という原則について取り上げる。本論では政権追求・政策追求という 2 つの目的に主に着目して分析を進めるのであるが、政治家にとって再選動機が重要なのは明らかであり、それが実態としてどのように扱われているかを確認することは不可欠である。

また、政治家の側の事情だけに着目するのではなく、政党の側の動機付けにも考察を加える。政党の側が移動議員の受け入れの可否を決定する際には、その政党の選挙事情が許すことが必要になるという前提を本論では置くのであるが、その際の「選挙事情が許す」というのはどういう状態を指すのかという点が明らかにされる。

ここまでで政党移動の理論的モデルが完成するので、続く第 6 章「自民党離党／復党議員の研究」と第 7 章「新進党と民主党：2 つの最大野党はなぜ異なる運命を辿ったのか」は、それをを用いての日本の政界再編過程の分析となる。

まず第 6 章では、一旦離党した政党に復党するというケースは、諸外国を見渡しても稀であり、なぜそのような行動に出たのかという分析はそれ自体興味深いものである。そこで本論では、同一議員が離党したタイミングと復党したタイミングの「違い」に着目することで、離党や復党を促進させる条件の特定が可能になると考え、復党という現象に分析を加える。また、復党した議員とそのまま他党に残留する道を選んだ議員との違いが生じた理由についても説明する。

そこでは、(1)自民党が与党である時期に自民党を離党した議員のうち、復党するのは特定の政策課題に基づいて離党した議員である、(2)自民党が野党である時期に自民党を離党した議員は、政権追求インセンティブに基づいて自民党を離党しているため、その多くが自民党の政権復帰に伴って復党する、ということが明らかとなる。

次に第 7 章について、本論では政権追求、政策追求という 2 つの目的を見かけ上のもので分類したため、その実質的な意味合いについてはここまで考慮してこなかった。しかし実際には、見かけ上の「政策追求」の内実には大別して 2 種類のパターンがあることが分かった。そこで本章では、その 2 つのパターンとは何であるかを明らかにするため、

新進党と民主党という 2 つの最大野党が、片や 3 年で解党されるに至り、片や二大勢力の一翼を 10 年余りに渡って担い続けるという異なった末路を辿った理由について考察する。

ここでのキーワードは政策的許容性と政権獲得期待の二つであり、これらはそれぞれ、見かけ上政策追求インセンティブを優先して行動していると想定される野党所属議員の中に、文字通りの政策追求の結果野党に所属している純政策追求型のアクターと、近い将来の政権獲得を期待して野党に所属する隠れ政権追求型アクターが存在するということに対応して見出された概念である。純政策追求型アクターをつなぎとめるのが政策的許容性であり、隠れ政権追求アクターをつなぎとめるのが政権獲得期待である。民主党は、新進党とは対照的に、この 2 つをうまくコントロールしているがために、凝集性を保っていると論じる。

第 8 章「結論」では、本論の意義についてまとめるとともに、日本の政界再編とは何であったのかということへの答えを示し、今後起こりうる再編の可能性について示唆する。

本論によれば、日本における「政界再編」とは、包括政党でほぼ一貫して政権政党でもある自民党が、政権志向の強い移動議員を積極的に受け入れて政権基盤を確立・強化しようとしたのに対し、最大野党が、一方では選挙に勝つために出来る限り広範な政党移動議員を受け入れようとし、他方それに比例して高まる分裂リスクをいかにして回避するかの模索を続けた歴史であった。

最後に、移動議員の受け入れによって政党のサイズを拡大するという戦略が、与野党双方において支配的となった日本の政界再編過程は、その帰結として政権交代後の政党システムの不安定化をもたらす可能性があることが示される。すなわち、将来の総選挙の結果、自民党が下野すれば、政権追求型の議員の離党が促進されることになりかねず、それは自民党の分裂危機につながる。一方、政権を獲得する民主党にとっても、これまで曖昧にしてきた政策について旗幟を鮮明にすることが求められることが予想され、それは勢力拡大の過程で幅広い政策ウイングの議員を抱え込んできたことから、分裂リスクに直結する。ひとたび落ち着いたかに見える「政界再編」それ自体が、新たな再編につながる不安定性を埋め込んだのであり、その意味において「政界再編」は、未だ終わってはいないのである。

(以上)